

氏名(本籍)	姚 紅 (中国)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第5968号
学位授与年月日	平成24年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	芥川龍之介文学における近代中国の都市空間
主査	筑波大学教授 博士(文学) 浜名恵美
副査	筑波大学准教授 博士(文学) 齋藤一
副査	筑波大学准教授 博士(学術) 平石典子
副査	広島大学准教授 博士(学術) 西原大輔

論文の内容の要旨

本論文の目的は、芥川龍之介の中国題材小説と紀行文に表象された中心都市だけではなく地方都市をも含めた近代中国の都市に注目し、多様な政治的・社会的・文化的コンテクストの綿密な調査を通して、芥川文学における近代中国の都市表象の意味と芥川の知的軌跡を新たに解明することである。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章

第一章 芥川の中国旅行の背景

第二章 芥川と上海における日本語マスメディア

第三章 南京の虚構と現実——中国旅行前後の「南京」表象

第四章 湖南の革命表象

第五章 芥川文学における武漢

第六章 上海・北京における伝統演劇の鑑賞——近代中国の知識人との比較を通して

第七章 芥川の天津体験

結章

序章は、文学における都市論について概説し、日本と中国における芥川の中国旅行や『支那遊記』の先行研究を批判的に検討し、本論の課題の意義について論じている。

第一章では、芥川の置かれた都市化の急速に進んだ日本社会のさまざまな近代化事象のなかから、とりわけツーリズムとジャーナリズムに注目している。「支那趣味」が流行った大正時代において、中国旅行に出る前から、ジャーナリストとしての芥川の内部にすでに一つの近代中国に対する複雑な構図が形成されており、またさまざまな矛盾・対立した文化的・社会的要素が絡み合っていたことを解明している。

第二章では、芥川の中国からの書簡に同封されていた日本語新聞の切り抜きに注目し、当時の日本語新聞が芥川の言動をどのように報じていたのか、またこれらの新聞記事が芥川の「上海遊記」にどのように反映されているのかについて、綿密な調査を行っている。さらに、芥川の上海旅行で案内役を務め、親交を結んだ島津四十起が出版した『上海案内』と「上海遊記」を比較して、芥川がどのように上海という国際的大都

市の様相を観察しているのか、「上海遊記」の冷淡な描写の背後にどのような心情が隠されているのかを考察している。

第三章では、中国旅行の前に書かれた小説「南京の基督」と、帰国後に発表された「江南遊記」の一節である「南京」を比較している。「南京の基督」における「南京」は、「南京奇望街の或家の一間」という私娼の私室に凝縮されたロマン主義的なものであったが、「江南遊記」の「南京」は、社会批判的な色彩を帯びたものとなっている。このように旅行前後の南京の表象を比較検討することにより、芥川の創作意識の一貫性と変容を明らかにしている。

第四章では、晩年に近づいた芥川思想と文学を中国体験との関係において論じる際に、重要作品として挙げられる小説「湖南の扇」をとりあげ、1920年代の中国の革命運動で活躍した女性革命家や女子学生に関する新聞記事により、従来謎とされた中国人娼婦の女主人公の実相を解明している。また、当時の激動する湖南の社会状況と照らし合わせ、湖南で激しい反日運動に遭遇した芥川の体験に括目して、彼の晩年の社会意識を解明している。

第五章では、先行研究では看過されてきた芥川の武漢旅行に焦点をあわせ、彼の紀行文・書簡・手帳などを整理し、1920年代前後の武漢の社会状況と重ねあわせて、芥川文学における武漢という近代中国の産業都市の表象について考察している。また、武漢で芥川と接触した日本人の正体を明らかにし、武漢の日本人のネットワークを通しておこなった活動を調査することによって、彼の西洋化・近代化についての思考を明らかにしようとしている。

第六章では、上海と北京における観劇体験や中国の伝統演劇への言及に焦点をあわせ、当時掲載された芥川と伝統演劇に関する中国の新聞記事について考察している。また、伝統演劇に関する芥川と胡適との会談を再検討し、同時代の日中知識人の「伝統と近代」に向かう態度の異同を究明し、近代中国の都市の中から中国の伝統演劇の文学的価値を発見した芥川の独自性を追究している。

第七章では、従来の芥川研究で言及されなかった天津における芥川の体験に注目し、芥川の文学作品で天津という近代中国の都市はどのように表象されているのかについて考察している。また、1920年代の天津の社会的・歴史的・文化的状況を視野に入れて、芥川と当時日本租界の有力者であった方若や西村博との交際や絵画鑑賞について著者が新たに発見した資料をもとに、芥川が天津で行った活動に関する新事実についても考証を行っている。

結章は、第一章から第七章までの成果をまとめ、さらに今後の課題について述べている。

審査の結果の要旨

本論文は、芥川の中国題材小説と紀行文に表象された近代中国の諸都市を都市論の視点から解明することに取り組んだ意欲的な論文である。本論文の著者は、中心都市だけではなく地方都市をも含めた都市に注目し、多様な政治的・社会的・文化的コンテクストの綿密な調査を通して、芥川文学における近代中国の都市表象の意味と芥川の知的軌跡は新たに解明されねばならない、という立場に立っている。論文の各章の考察は一貫してこの立場からなされ、またその分析もこの著者の立場を支持するものとなっており、全体としてまとまりのある論考となっている。

芥川龍之介と中国との関わりについては、もはやこれ以上開拓すべき余地はないと思われるほど多数の先行研究がある。しかし、本論文は都市論の視点を導入し、北京や上海以外の地方都市——南京、武漢、長沙、天津など——を重視することによって、この分野で独創的な成果を挙げている。比較文学の分野では、従来の先行研究は主に西洋文学が日本文学に及ぼした影響を解明してきたが、1990年代以降は日本の作家が中国を代表とするアジアをどう見てきたのかを解明するようになった。本論文は、このように変化した比

較文学研究の中に高く位置づけることができるだけの充実した成果を挙げている。さらに、著者は、日本と中国の各地の図書館で何度も調査を行い、日本近代文学館に保存されている芥川の中国からの書簡に同封されていた日本語新聞の切り抜きを本格的に分析し、中国の図書館では同時代の書籍や新聞記事を発見している。これらの新資料の分析に基づく近代中国の諸都市の現実と芥川が関わった当地の人的ネットワークが実証的に解明され、芥川の国際的研究に新たな知見を寄与するものとなっている。各章の問題設定はいずれも先鋭であり、特に第二章、第五章、第七章は著者の卓越した調査能力と洞察力を示している。

以上のように、本論文は力作ではあるが、問題がないわけではない。文学・文化研究における都市空間論の動向、芥川のジャーナリズムについての認識の再検討など、本論文が十分に論じることができなかった課題が残っている。

とはいえ、このような課題への取り組みは著者の今後の研鑽に託するところのものであり、芥川龍之介文学における近代中国の諸都市の表象を都市論の視点から新たに解明した本論文が達成した成果は極めて優れたものであると判断される。

平成24年1月21日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。